

人格主義

阿部次郎

伊藤友信

阿部次郎は大正時代を代表する哲学者のひとりである。では大正期とはいかなる時代であったのであろうか。唐木順三の『現代史への試み』を見ると、「修養に代って現はれ来た知識階級の『教養』という新しい概念……」という一文に出会う。つまり唐木は「修養」と「教養」との一字違いの言葉をもって、明治から大正への思想的転換を「修養から教養へ」としてとらえている。そして同時に大正教養派の形成過程を明らかにしている。いまここで形成過程についてふれる余裕はないが、その唐木の指摘するところをふまえながら、明治と大正との違いを私なりに整理してみよう。明治時代は、(1)全体的に啓蒙期といえる。そして客観主義もしくは現実主義であった。たとえば哲学においては、現実の生活をふまえた実証主義、唯物論、進化論が主流であった。(2)西

欧哲学の受容時代、当然のことながら伝統思想と外来思想との問題が生じた。(3)哲学は政治と密接に関係していた。外面的で政治に従属していた。これに対して大正時代はどうであったのであろうか。(1)主観主義もしくは理想主義、もちろん明治の後半期はドイツ哲学受容の影響から、観念論的理想主義の哲学が盛んであったが。(2)西欧哲学の受容については明治と同じであるが、その受容の姿勢が変化した。選択的・批判的に教養としての哲学を受容しつつ、自分の哲学を主張するようになった。(3)哲学と政治とは離反した。そして哲学は内面化していった。

この大正時代の哲学者が阿部次郎である。そして日本における最初的人格主義の哲学運動はこの阿部によって開始されたのである。「感情移入的人格主義」のテオドール・リップスを範としていることは周知のとおりである。

さて阿部は幸福なひとであったと思われる。それは上に述べた

ような大正時代によりよくマッチした思想家であったからである。大正教養主義時代、いいかえれば大正デモクラシーといわれる人道主義、自由主義の時代を象徴するような阿部であった。明治は強く、大正は弱いといわれるが、あえていえば、阿部は弱いイメージのつきまとう善良な人物であった。上山春平氏は、『日本の思想—土着と欧化の系譜—』の中で、「阿部次郎と大正教養主義」を論じて、そこで上山氏は『三太郎の日記』を貫いているものは「弱者の哲学」であるという。弱者の哲学という発想は、いかにも阿部と大正期とが重なりあう考であって卓見であろう。上山氏は「俺は偉くも強くもない。……此小つぽけな、ケチな弱虫の俺……」「俺は偉くもなく強くもない事実を恥とする、併し決して此自覚を恥としない。……」「僕は自分のつまらない者であることを忘れたくない。併し自分のつまらないことさへ知らぬ者に比べれば僕等は何と云ふ幸な日の下に生れたことであろう。此差はソクラテスと愚人との差である。此事を誇としないで、又何を誇としようぞ」という『三太郎の日記』の一節を引用しながら、阿部の弱者の哲学ぶりを掘りさげている。そして上山氏はここで、阿部が知的エリートとしての自負をあからさまに前提としていることに注目している。が、私にはそのことはさほど気にならず、阿部のさざっばさも考えられず、むしろそれは阿部の思想の特質としてとらえたい。それよりも「弱者の哲学」から出発する阿部独自の人格主義にこそ深く興味をいだくのである。

汝自身を知ることから無知の知を自覚し、そこから反省的・内省的な人格主義が展開されたことに注目したいのである。阿部は「誠実」を尽くしてみずからを顧みた。「誠実の深さもまた人格の深さと始終する」(『三太郎の日記—自序—』)姿勢をくずさなかった。

ではこうした阿部の人格主義はどのような特色をもっているであろうか。もちろん、リップスを手本にしている阿部の人格主義は明らかにリップス的である。ドイツの哲学者で心理学者であるリップスは、意識体験の学としての心理学を確立した。一言でいえば、「意識は自我の意識——個人我の中に生起する意識体験——としてみ与えられるから『自己観察』(内省) によって直接把握される経験科学である、」とするのである。こうしてみると、阿部の人格主義が内省的・自己観察的であるのは当然であろう。もっとも、かりにリップスの影響を受けなかったとしても、阿部の体質や気質から生ずるものは内省的な人格主義であったかも知れない。

さてここで、阿部の人格主義の特徴を考えるに先きだつて人格主義について簡単に考察しなければならぬが、その時間はない。ただ「ペルソナ」とかキリスト教では「位格」という概念が「人格」を意味するようになったのは二十世紀に入ってからであるという点をおさえておきたい。ルネサンスによって発見されたのは人格ではなく自我(自己)であった。自我という個体の発見であ

って、人格の発見はその後のことである。では自我と人格との關係はどうみればよいのであろうか。一言でいえば、自我は内的に直接的に体験されるもので、自己である。それが何であるかというのではなく体験であるというものである。これに対して人格は、体験を越えて理念と理想とを問題とするものである。ひとつの言葉を借りるならば、「人格はあらゆるものの中で最も高貴にして完全なもの」(トマス・アクィナス『神学大全』)ということになる。(三鳴唯義『人格主義の思想』を参照し教えられること大であった)。

ところで阿部は、自我と人格とを明瞭に區別して考えてはいなかった。ただ明治の哲学においては、高山樗牛のニーチェ的個人主義や網島梁川のグリーンの自我實現説を経て阿部の人格主義に進展したのであるから、その点では自我説から人格主義へと區別されていたことになる。

すでに述べたように阿部の人格主義は感情移入的人格主義であった。そして「誠実」をもって他をみる。他人との誠実な交わりをする。自分の善意志を無制約的に拡大しつつ、これを最良絶対として相手(他人)に投影する。いわば性善説的であった。だから、たえず相手を「信頼」する。交わる相手を善としなければ阿部の人格主義は成立しない。信頼の情は、ロマン的美意識にささえられる理想主義であったのである。自己の人格の中に「当為」^{ソルレ}として形成された人間的善の理想型を相手に投影する倫理学であったともいえよう。こうした倫理的感情移入の人格主義は、まさに案

観主義的理想主義となる。阿部は『人格主義』の中で、「人格主義とは理想主義の内容を更に立ち入って規定した」言葉であるという。さらに理想主義を次のように規定している。「それは言葉通りに、理想を指導原理としてあらゆる思想と生活とを律して行かうとする主義である」とし、「理想成立の順序はどうあっても、それが一度理想として確立するや、これに現実を命令し支配する権威を与へて、この理想を生活原理とせんとする情熱である。」という。阿部は情熱的に現実を生くる理想主義者であった。このときの「理想」とは、まさしく「当為」として形成された理想・理念であるから、事実としての現実に適用すると問題が生ずる。

つまり理想と現実との問題の中で戦いが生ずるのである。阿部が「理想主義の生活は戦の生活であるということが許されるであろう」というのがそれである。これが阿部の現実生活における苦悶であり、苦悶であった。であるから阿部の理想主義は、現実主義に對立する理想主義という一般的な理想主義ではなく、現実生活に根をおろした理想主義であったのである。情熱的に生きて理想を現実に実現することであった。しかもそれは、実現された結果のいかなるものを問うのではなく、実現の意志がたえず問われるものであった。「新しい情熱は常に新しい哲学を要求せずにはゐられない」生活であった。『三太郎の日記』を貫いている阿部の人格主義・理想主義とはそういうものであったのである。

阿部三四歳(一九一六)のとき、「自分の私見を混入すること

を避けて、ひたすらリップスの思想と情熱と感激とを生かそうとし」て著わした『倫理学の根本問題』をかきりに、一九二〇年三八歳の阿部は、満洲、韓国にまで渡り阿部独自の人格主義の思想運動を実践した。この記録をもとにして『人格主義の思潮』（一九二一年）をまとめたが、それは彼の人格主義を説きつつ、当時いま一つの大きな思潮であった社会主義に自分の思想が対置することを鮮明にした書であった。一年後に出版された『人格主義』という阿部の著者は、『人格主義の思潮』を基調としたものであった。「人格主義とはかくのごとき人格の成長と発展とに至上の価値を置くものである。したがってそれは当然に物質主義と正反對の立場」に立つという。阿部の物質と精神とに対する価値観がここに提起されたのである。当然のことながら物質観の線上に社会主義が考えられている。弱者の人格主義・理想主義者の阿部は、物質・富豪―権力者―強者、そして強者がマルキシズムに連続していくというイメージをもってマルキシズムをとらえて批判するのである。阿部のこうした社会主義批判は、竹内仁によって直ちに批判された。その点については船山信一氏『大正哲学史の研究』、峰島旭雄氏『大正期における倫理・宗教思想の展開―阿部次郎の人格主義』に詳しいので、ここでは割愛する。

（この小論は阿部の人格主義についての略述で、ほとんど学会発表のままである。「大正・昭和期における西洋思想の受容と反応」という統一テーマからは大いに不足した小論であるが、その点については他

の場で考えたい。）

（いとう・ともものぶ、倫理思想史、芝浦工業大学教授）